たくましい巡査が來た。
僕の横に腰を据える。
どうするんだと想つて僕は、自動車の横の厚い硝子を平手で叩き割つた。
破片が散つて、其處に集つてゐた人群が飛び退いた。
巡査は制帽の紐を下顎に廻して、僕の頭をぎゆう〳〵おさへ付けながら、またくらに挾んで膝頭に締め付けた。
拳骨を無茶苦茶に僕の頭にかます。
二百以上もかましたに違ひない。
自動車は其の間走つてゐる。
錦町の警察に放り込まれた時の印象は、僕の記憶から脫失してゐる。
留置場の中で氣が付いて見ると、僕は裸になつてゐた。
格子の間から巡査に向けて小便をヒリ掛ける。
すると巡査がバケツに水をくんで、僕の隙きを見て、頭から浴せる。